「発問」って案外難しい!

知っておきたい「発問」の役割

元新宿区立西戸山小学校教諭　安田（やすだ） 恭子（きょうこ）

この間、授業を見てくださった先生から、
「あんなに次々と質問をしていったら、子どもたちの考える間がなくなってしまう。もっと考えて発問しないと…。」
と言われました。

いちばん困っているのは発問です。学習のめあてを決めたいときに、
「学習のめあてを決めましょう。」
という言葉で投げかけてよいのか、
「このお話で、みんなで考えたいことは、どんなことですか。」
と言ったほうがよいのか、迷います。

確かに、発問は難しいですね。例えば次にあげる二つの発問。どちらをどのような場面で使うとよいのでしょうか。
「○○のことが書いてあるのは、何段落目ですか?」
「△段落は、何について書かれていますか?」

一見同じように見える二つの発問ですが、授業者の意図は違います。

「発問」にはいろいろな役割があります
–「サクラソウとトラマルハナバチ」(五上)を例として–

今日はみんなで、この「サクラソウとトラマルハナバチ」の文章構成をつかみましょう。

本時の学習でねらいとすることに直結した問いかけであり、**主発問**といえる。

段落ごとに主に何について書かれているのかを整理すると構成がわかりそうですね。

主発問を解決するために学習段階を細かくして、活動しやすくした問いかけで**補助発問**にあたる。

それぞれの段落に番号をつけておくと便利ですから、段落に番号をつけましょう。

主発問解決のための具体的方法で、補助発問を達成するために**指示**している。

このワークシートで作業をしましょう。

必要に応じて配布する。(**指示**)

先生、2段落は、サクラソウとトラマルハナバチの両方が書かれています。どっちについての段落ですか?

この段落は、サクラソウとトラマルハナバチのどちらのことについて、よりくわしく書かれていますか。

ぼくは、2段落が、サクラソウのことが書かれている段落だってわかったよ。

サクラソウのことに気づいたのは立派ですね。では、サクラソウのどんなことについて述べられていますか。

受粉をするのはサクラソウだから、3段落は、サクラソウについて書かれていると考えていいのかな。

ここに「受粉の仲立ち」という言葉がありますね。これはサクラソウのことですか。それともトラマルハナバチのこと?

一人一人の学習の状況や子どもの問いかけに応じて教師が声かけをしているもので、**助言**といわれる。
多くは個別にされるが、時に全体指導の場でも行われる。

みなさんがそれぞれの段落の内容をとても上手にまとめたので、文章全体の構成をしっかりと把握する準備が完了しました。次の時間は、この文章構成の特徴を考えてみましょう。

本時の学習の**評価**となる言葉で、個々の学習を認め、価値づけをする大切な言葉かけである。
また、次時への意欲にもつながる。

発問上手になるために心がけたいこと

① 主発問は精選して
② 補助発問の準備を忘れずに
③ 言葉を吟味して発問を
④ 子どもの反応をしっかりと評価

①

「主発問」は、その時間の学習のめあてに直結するものです。

ですから、大体は一つか二つです。主発問が四つも五つもあると、ピントがずれて、めあてから外れた学習になってしまいます。

②

「主発問」を投げかけただけでは、子どもたちが戸惑い、学習が進まないことがあります。

そんなとき大切なのが「補助発問」です。「主発問」を解決するための方策を考えさせたり、段落を細分化したりして示すとよいでしょう。

③

発問の言葉は、音声であるため、時として消えてしまい、意図が伝わりきらないときがあります。そこで、きちんと板書をしておくとよいでしょう。

また、学年によって、使うべき言葉、使うには早すぎる語句もありますので、十分に吟味をして、ふさわしい言葉で発問をしましょう。

④

教師は、自分が発問をすると、その意図に即した答えのみを取り上げて学習を進めがちです。

一人一人の反応をしっかりと受け止め、学習の中で価値づけをしてあげることが大切です。

どの子どもにも、先生の発問に答えてよかったと思わせることが、次の学習への意欲づけにつながります。

P.10にあげた二つの発問ですが、前者は段落同士のつながりを学ぶときに大切です。また、後者は、その段落の要点をもとに文章構成をつかむときに有効です。この1時間で子どもと学ぶことは何かを考えるとき、発問はとても大切です。しかし、どんなに吟味に吟味を重ねた発問であっても、それを言葉にする先生の人間性によって、受け止める児童の反応は全く変わってしまいます。

その大切な発問に至るまでに、先生の目が何を見取っているか、発問をするときの音声、しぐさ、目の位置、間など、単に言葉を発するのではなく、子どもとの通じ合いの中でこその発問であることを忘れないようにしましょう。

「何が知りたいの。」と発問の意図を問われて

京都女子大学教授　吉永（よしなが）　幸司（こうし）

(1) 「先生、何が知りたいの。」と問われて

「ごんぎつね」の授業をしたときのこと。教材研究を丁寧にして教室に向かった。学習は最終場面。ごんと兵十はどんな気持ちなのかを問う発問をした。読むことへの意欲も高まっていたし、内容の理解も確かだと思っていたので、どの子も、「はい。」と挙手をするだろう、授業は盛り上がるだろうと思い込んでいた。

ところが、発問のあと、ほんの数人の子が挙手。それもいつものメンバー。この反応の鈍さにいら立ち、皮肉っぽく、「こんな簡単な質問に答えられないのですか。」という意味のことを言ってしまった。教室は、沈黙が続く気まずい雰囲気になった。その時、いつもはあまり発言しない子が立ち上がり、「先生は、何が知りたいのか分からない。答え方がわからない。」と、発言したのである。その意図が分からず、逆に、「では、あなたたちは、どんな質問だったら答えられるの。」と、問い返した。子どもたちは、「ごんもかわいそうだけど、兵十もかわいそうだと思うから、『かわいそうなのはどっちかな』と聞かれたら答えられる。」「このあと、兵十はどうしたか聞いてほしい。」など、次々と言い出した。「どんな気持ち」より、おもしろい問いであった。そのとき、紋切り型の発問では、子どもの心に届かないことを知った。このことがあってから、教室には、「先生、何が知りたいの。」と思っている子がいると考えるようになった。若い頃の授業風景である。

(2) 発問の三つの類型―文章検討発問を大事にする

発問には三つの類型がある。

一つは答えがある発問。「だれ、いつ、何」を確かめる内容のものがある。これは文章を素直に読めば、答えがどこかにある。正解か不正解かはっきりさせる発問である。事柄の確かさを確認することが主な目的である。

二つ目は、気持ちや感想、様子を問う発問。「どのように思いましたか。」「気持ちを考えましょう。」というように、見方や考え方を確かめるのが目的なので、正解か不正解かの区別はあまりない。考え方の方向が間違っていなければ、おおむね可とする場合が多い。

三つ目は、自らの考えを整理し、語や文章を関係づけて答えを導き出すもの。「二つの文を比べましょう。」「考えのわけや根拠はどこですか。」など、自分の読み取りを明確にするために語と語、文と文を関係づけて答えさせるのである。正解や不正解ははっきりしないが、考える筋道を論理的に説明したり、根拠となる語や文、文章を活用して、説明したり表現したりするので、考える力が育っていく。この発問がうまく授業で機能すれば、「先生、何が知りたいの。」と問われることはなくなるだろう。

授業は、発問の三つの類型をうまく組み合わせて構成すると分かりやすい。